

個人の可能性を引き出す、 知的活動の統一的バックアップツールの開発 － 自分を編集する土壌 soila －

1. 背景

インターネットによって個人が自由な情報の取得と表現の手段を獲得した。個人が組織に属さずとも情報を扱える状況によって個人と組織の関係性が変化し、人材の流動化の気運が高まりつつある。

このような環境の中で、個人が自分の力を生かすにはどうすればいいのだろうか。新旧のメディアが提供する豊富な情報は能動的に使えば有益であるが、逆に受動的に利用した場合、絶え間なく与えられる情報に飲み込まれ、立ち止まって考えることを忘れがちになる。今後、個人が自分の力を生かすために必要な能力とは、自分にとって価値のある情報とは何かを自ら規定し、判別する能力であると考え。従来のように一つの価値基準を目指すのではなく、自分が何を求めているのかを知っている能動的な個がうまく協同するとき、新しい組織としての力が発揮されるのではないかと考える。

2. 目的

本プロジェクトは以下の二点を実現するツールを提供することを目指した。

- 1) 一人一人が考えを振り返り、自分を知る方法を提供すること（自分の振り返りが出来る場）
- 2) それぞれの（知的）活動にとってよい出会いの機会と手段を提供すること（コラボレーションの機会）

これらを実現するにあたり、保存する情報をいかに再利用、共有しやすくするかということが問題となる。これらを実現するための方法として、情報のコンテキストを残す手段を検討した。

3. 開発の内容

上記目的を実現するために、大きく分けて二つの機能を提供した。

3-1 個人の知的活動のベースとなるフィールド

まずインプットを気軽に放り込んでおく、自分が知的活動をおこなう統一的なベースとなるフィールドを提案する。目にしたもの、気になったものを次々と放り込み、それに対して感じたこと、考えたことをメモしておくことを想定する。

3-2 個人の活動を共有し合い、コラボレーションが行われる場

この機能は 3-1 をもとに作成したメモやアウトプットの、一部を共有する感覚で“共同体”を形成できる機能である。ここで“共同体”として想定するのは、個人が集まって行われるプロジェクトや、関心のある共通トピックに対する投稿などである。

総じて、情報を一覧して管理、編集できるインターフェースを基本として、参照した情報の記録を残し、リストできる機能や、情報にまとまりを作り、共有範囲を自由に設定して協業が行える機能を提供した。

4. 従来の技術との相違、特徴

4.1 これまでのメディアの欠点を補う記録ツールの提供

例えば紙に代表されるアナログのツールは自由度が高いことが大きな利点であるが、保存や検索・共有といった情報の再利用性が低いという欠点がある。一方、テキストエディタに代表されるデジタルのツールは、再利用性は高いが入力インターフェースや保存形式が限定されている。本ツールは入力や構成、編集に自由度を与えながらも、容易に引用する方法や新しい情報の探索方法を提供し、高い再利用性を提供する。

4.2 隠れた関係性の表現

これまでの情報の分類の主な方法であるカテゴリズでは、ある情報の一面しか表現できない。その問題を解決策としてタグなどのメタ情報を付加する方法があるが、この方法はユーザに余分な操作を要求することになる。本システムは、情報を複数の文脈で使った場合に、その参照を記録していくことで、自動的にその文脈間の関係性を表現する。これによって、これまでは表面に現れなかった関連も表現することができ、コンテンツの再利用性を高め、他のユーザにとっては新しい関係性の発見の機会を提供する。

4.3 公開範囲の柔軟な設定

これまでは、公開範囲があらかじめ設定されたメディアを通じて情報の共有を行ってきたため、情報の公開にコストが存在する。本ツールでは、まずはどんな情報でも、人の目を気にすることなく保存し、あとから簡単な操作で公開範囲と公開先を選択することができる。この共有方法の指定によって、公開している情報としていない情報を、自分の中での関連性を損なわずに管理できる。

4.4 自分の拠点から行えるゆるやかな協業

上記に関連して、自分のワークスペース上に他者の共有された領域を配置できる。

このことにより、実空間の場を共有している感覚に近い形で、共有された領域内での議論や考えの変化を察知することができる。また、反応や意見を強く要求せず、ゆるやかに議論に対してコミットすることができる。これにより結論だけでなく、考えの過程も共有することができる。

4.5 コンテキストの取り扱い方への考察

これまでの情報処理においては、その意味内容を一意に伝えることが重要視されてきた。本プロジェクトは、その情報が生まれた状況や置かれている状況、扱う人によって変化するコンテキストに着目し、その利用と表現の仕方を考察した。これは集合知をどのような形で意味付けしていくか、ということにもつながる。

5. 期待される効果

本ツールは、個人の持つ情報の再利用性を高め、編集のベースを提供することで、各人なりの価値基準の再発見や、文章やプレゼンテーションなどの表現する前の構成作業に貢献すると考えている。また、新しい共有の方法を提供することで、人々の協業が行われる際の心理的な障壁を低減し、各人が各人の興味や、プロジェクトに参加する意味付けを保った協業体制を実現できると考えている。広く個人のユーザに利用されることを通じて、研究等のアイデアをまとめる際や、プロジェクト活動を開始する際などに利用されるプラットフォームとなることを目指す。

6. 普及の見通し

当初は既存の外部情報をまとめ、自分なりに構成・再構成できるツールとして個人ユーザの獲得を目指す。また、イベントの振り返りを支援する形で、オンライン上のスクラップブックとしての利用シーンを示していく。

さらに企業におけるグループウェアやプロジェクトの可視化ツールとしての用途も考えられ、個人に対するマーケティングと同時に、利用方法の提案を行っていく予定である。

7. クリエータ名

佐野 智章 （奈良先端科学技術大学院大学）

参考) 関連 URL

<http://soila.jp>